

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370292

研究課題名(和文)19世紀イギリス小説における「スキットルズ」の痕跡研究

研究課題名(英文)Reading the Victorian Novel under the Shadow of "Skittles"

研究代表者

永富 友海 (NAGATOMI, Tomomi)

上智大学・文学部・教授

研究者番号：60305399

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1860年代前後を中心に当時のジャーナリズムを賑わせた「高級娼婦」"Skittles" の存在を視野に入れることで、研究者がこれまで取り組んできたテーマ「ヴィクトリア朝における売春婦をめぐる言説の研究を発展させることを目的としている。"Skittles"の研究は、ヴィクトリア朝の「家族」の言説を支えるイデオロギーとしての売春婦の重層性を炙り出すことで、19世紀英国小説の読解に新たな視点を提供してくれる可能性を秘めている。

研究成果の概要(英文)：This project aims at initiating a new analytical approach to the reading of the Victorian novel by revealing varied strata of prostitutes who bolster the ideology of the Victorian family. Although it is commonly acknowledged that in the Victorian society prostitutes are the other side of the coin of the Angel in the House, the binary opposition is in fact oversimplified: well-known figures in British journalism in the 1850-60s was a group of courtesans euphemistically called "pretty horsebreaker," who frequently appeared in "society" with patrons of high rank, almost superceded the middle-class ladies and even noblewomen as wife and companion for their husbands. Under the shadow of these pretty horsebreakers, quite a few Victorian novels allow, I would like to argue, of a new set of interpretations.

研究分野：英文学

キーワード：売春婦 高級娼婦 私生児 ファミリー・ロマンス 家族

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者のこれまでの関心は一貫して、19世紀イギリス小説を「結婚」と「相続」のプロットから読み解くことにあった。19世紀イギリス小説は総じて結婚と子どもの誕生でエンディングを迎えるが、その結婚とは、そもそも血縁ではない女性を妻とする、つまり他人を身内に読み替えることで成立する制度である。小説が、他者の身内化という構造をもつ結婚でクロージャーを迎えるとするのであれば、テキストのなかで展開される身内/他者のレトリックを読み解くことで、19世紀英国小説の新たな見取り図を描き出すことができるのではないかという発想が、本研究に至るまでの研代表者の一連の取り組みの骨子となっている。

(2) この発想を前提として、研究代表者はこれまで19世紀英国小説の分析を、主に二方向からのアプローチを用いることで取り組んできた。

法的見地から18世紀～19世紀における「結婚」と「相続」の制度を調査分析する。具体的には1753年のハードウィック結婚法、1835年のリンドハースト結婚法の制定には、いかなるレトリックが行使されていたかを分析した。同様に、長子相続、限嗣相続といった慣習に関する関連一次史料を可能な限り入手し、そこで用いられているレトリックの分析をおこなった。

上記の一次史料分析と並行して、個々の小説を、結婚法と、身内/他者のレトリックという観点から、精読分析した。その際の手続きとしてまず、個々のテキストで、身内/他人の境界線がどこに、どのように設定されているかという点に焦点を当てた。身内/他者を分かつ要となるのが、血縁である兄弟姉妹、血縁でありながら法的に結婚が認められている従兄弟・姉妹、血縁ではないが婚姻が禁じられている亡妻の姉妹・亡夫の兄弟である。そのうえで、結婚のプロットがいかなるレトリックを駆使して編み出されていくのかを詳細に辿っていった。この研究の成果は、サセックス大学に提出した博士論文という形で結実した。

(3) 19世紀英国小説を、結婚と相続のプロットに着眼して、新たな読解の可能性を探ろうとする作業を進展させていく過程で次に着目したのが、結婚、相続というイデオロギーを裏面から補強する負の要素(=排除されることによってこれらのイデオロギーの存在を支える要素)すなわち「墮ちた女」、そのなかでも特に「売春婦」、そして「私生児」の表象である。この両者が、ヴィクトリア朝の中流家庭にとっての理想であった「リスベクタビリティ=お上品さ」の背後にはりついていることは広く了解されているにもかかわらず、前者についてはこれまで歴史研究の

範疇を出ることはなく、一方後者については、特定の作家のセンチメンタリズムと結び付けるなど、印象批評の延長線上にある作品論の形をとるに留まっていた。しかしながら、中流階級の紳士との間に正式な婚姻関係ではない性的関係を取り結ぶ「売春婦」と、婚外子としての「私生児」は、まさに身内と他人の「あわい」に位置する者たちであるという意味において、見逃すことのできない重要な存在である。文学テキストにおける彼らの存在、あるいは非在の表象を分析することは、結婚と相続を主要なプロットとする19世紀イギリス小説研究において、まさに不可避の行程であると考えられる。以上の点を踏まえて、歴史的アプローチと、個々の文学テキストの具体的な分析という二方向からの取り組みを実践した。

「私生児」に関して、1834年成立の救貧法改正案のなかの私生児についての条項をめぐるレトリックの分析をおこなった。

「売春婦」については、19世紀イギリスにおける最大の社会運動、女性運動のひとつである「伝染病法」廃止運動を、伝染病法制定に関わるイデオロギーを辿りなおすことによって、レトリックの観点から分析した。

ディケンズが1850年代に精力的に取り組んだ社会活動「墮ちた女」の更生施設である「ユレニア・コテージ」の設立と運営を、当時の一次史料や書簡集を紐解き、そのレトリック分析をおこなった。

ディケンズのような作家と比較すれば正典性の低い(売春婦や私生児といった負の要素を前景化する傾向にある)センセーション・ノヴェリスト、M・E・ブラッドの代表作『レイディ・オードリーの秘密』をとりあげ、「墮ちた女」であるヒロインの表象において用いられている類似と差異のレトリックが、身内/他者のイデオロギーをいかに演出しているかを分析した。

上記で得られた知見を援用し、正典作家の代表格であるディケンズの『デイヴィッド・コパーフィールド』において、実は家庭(=home)と、墮ちた女の更生施設(=Home)のレトリックが地続きであることを明らかにした。

ヴィクトリア朝後期の正典作家でありながら、センセーショナルな要素を少なからず作品に盛り込むトマス・ハーディの代表作のひとつ、『カスターブリッジの町長』という作品は、ヒロインを私生児に設定しているが、庶出という負の要素がテキスト成立の阻害とならないようにするためのいかなるレトリックを行使しているかを明らかにすることで、本テキストの読解の新たな地平を切り開いた。この研究の成果は、フランスの学会で口頭発表したのち、同学会のウェブ上の学会誌に原稿を発表し、海外のハーディ研究への発信という形での成果発表をおこなった。

2. 研究の目的

上記の研究を遂行する過程で、「売春婦」を一枚岩的にとらえすぎているのではないかという疑問が浮かび上がってきた。ディケンズが救済の対象とした「墮ちた女たち」は、貧困や家庭の事情で身を持ち崩すことになった労働者階級もしくは貧民層に特化されている。ディケンズの小説や、その他のヴィクトリア朝小説で描かれる「売春婦」の造形も、主にその線上に位置づけられる。ところが、そのような女性たちとはまったく別の範疇の「高級娼婦」の存在が、1850年～60年代のジャーナリズムを賑わせていたという事実を知るに至る。彼女たちは、首相や貴族と浮名を流し、様々な催しや社交の場に現れ、馬に乗ってハイド・パークを闊歩し、人々の眼に触れる存在であるどころか、中流階級の婦人たちと同じ場を共有することで、一時期激しい物議を醸していた。なかでももっとも高い知名度を誇っていたのが、「スキットルズ」というあだ名で知られていたキャサリン・ウォルターズという高級娼婦である。『パンチ』や『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』といった人気雑誌や、『タイムズ』、『サタデー・レビュー』といった新聞雑誌で取り上げられながらも、「スキットルズ」に関する歴史資料は極端に少なく、彼女を取り巻く言説は、当時の社会の文化状況の一角を形成する貴重な事象であるにもかかわらず、アカデミックな研究領域においてはほぼ手つかずのままに留まっている。

この未開の領域を開拓するにあたって鍵となるのが、1860年代に隆盛を極めたセンセーション・ノヴェルである。とりわけM・E・ブラッドンのいくつかの小説には、明らかにスキットルズの特徴と呼応しあうと考えられる人物やシーンが描きこまれている。スキットルズの影を明白に同定できるようにしたテキストをまず分析したのちに、作品中に娼婦をしばしば登場させるウィルキー・コリンズやチャールズ・ディケンズの小説を再読し、そこで描かれる娼婦像に「高級娼婦」との関係性を認めることはできないか、あるいは「高級娼婦」の存在を排除することで、「貧しい娼婦」と「家庭の天使」という二分法の構図がどのような死角を抱えることになっているかを分析する。それによって、1980年代辺りから文学史における格上げが図られ始めたセンセーション・ノヴェルというジャンルの特性を精緻化するだけでなく、19世紀イギリス小説の核を成す「家庭」のイデオロギーの重層性をあぶりだすことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 「スキットルズ」に関する一次史料の収集をおこなう。彼女の伝記以外に、関係者の伝記、書簡集などで、彼女についての言及が

あると思われるものを徹底的に収集した。1850年代後半から1860年代前半にかけての新聞雑誌を検索し、高級娼婦やスキットルズに関する記事を収集した。『タイムズ』については上智大学図書館のデータベースを利用し、『サタデー・レビュー』については早稲田大学図書館で閲覧、複写をおこなった。『パンチ』、『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』は、上智の図書館やウェブ上で入手可能な巻は、他大学に複写を依頼した。その他、国内外の大学図書館には収蔵していないようなゴシップ誌については、ロンドンのMary Evans Libraryを利用した。

(2) M・E・ブラッドンの小説、伝記、書評、彼女が編集に関わった雑誌の調査をおこなう。『オーロラ・フロイド』と『レイディーズ・マイル』には、スキットルズを連想させるヒロインの人物造形や、ハイド・パークのロトン・ロウを馬で闊歩する高級娼婦の描写が見出せる。この2冊の精読分析に加え、両作品についての書評を収集した。それ以外に、センセーション・ノヴェルに関する批評の収集も併せておこなった。ブラッドンが編集に関わった雑誌『ベルグレイヴィア』については、東京大学図書館が所蔵するマイクロフィルムを利用して、関連記事の収集に努めた。また、『ベルグレイヴィア』編集におけるブラッドンの戦略（センセーション・ノヴェル格上げに関する）についての先行研究の動向も調査した。

(3) ブラッドン以外の作家の作品に見られる娼婦もしくは娼婦ではないが、テキストの構造上、娼婦に準ずる（娼婦と同様の特性を付与されている）女性の表象を考察した。具体的には、ウィルキー・コリンズの『ムーンストーン』、『ノー・ネーム』、ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』、『デイヴィッド・コパーフィールド』、ジョージ・エリオットの『アダム・ビード』、『ダニエル・デロンダ』、ミセス・ギヤスケルの『ルース』、『シルヴィアの恋人』である。スキットルズを連想させる乗馬のシーンについては、作品の挿絵や映像作品にも注目し、高級娼婦において見られた異性装という現象がどのように表されているかを確認した。

4. 研究成果

(1) いくつかの国際学会に参加し AVSA (Australasian Victorian Studies Association) の年次学会 (2015年、香港大学)、NAVSA (North American Victorian Studies Association) の国際学会 (2015年、於ハワイ)、Wilkie Collins学会 (2015年、ロンドン大学)、最近の研究の動向に関する情報収集と意見交換に努めた。またブリティッシュ・ライブラリ、ロンドン大学の Senate Library で、国内では入手不可能な史料の収

集をおこなった。

(2) 『オリヴァー・トウイスト』論を完成させた。当該テキストでは、ナンシーという娼婦、「墮ちた女」であるアグネス(オリヴァーの父親と不義の関係を取り結ぶ)、アグネスの妹であることにより、「墮ちた女」に準ずる扱いを受けるローズといったように、「墮ちた女」の多相性がサブ・プロットとして重要な機能を果たしている。一方で彼女たちをつなぐレトリック、他方で彼女たちを差異化する要因をあぶりだすことにより、私生児(=起源が空白)であるヒーロー、オリヴァーの脱中心化の構造を読み解いた。数年うちにディケンズ作品の読み直しを試みた論集を出版予定であり、本論もそのなかに収める予定である。

(3) 当研究の途上で、研究当初はまったく考慮に入れていなかった新しい角度からの考察を取り入れる必要性に気づくこととなった。すなわち、1850年代後半に、ロンドンでの見世物として大人気を博した horsebreaker (暴れ馬の調教師) の存在である。アメリカ人であるレアリー氏は、それまでイギリスでおこなわれていた乱暴な調教とはまったく異なる手法を導入し、一躍人気となるが、実はこの horsebreaker という単語が、高級娼婦を指す婉曲語 pretty horsebreaker として流通するようになる。しかも彼は自らを horsetamer と呼んでおり(この単語はイギリスでは存在しない)興味深いことに、tame (= 飼いならす) という語は、コリンズやディケンズの小説における語法(夫が妻を飼いならす)と響きあう。そもそも娼婦は、当時のイギリスでは一般に社会悪(= social evil)と呼ばれており、婉曲的な呼び名を必要とする存在であった。そのことを念頭に置くと、スキットルズをはじめとする高級娼婦の研究は、その導入として、レアリー氏による調教の見世物と切り離すわけにはいかないと考えられる。こうした新たな発見があったことに加え、本研究を遂行していた3年間は役職上の理由から、予定していた学会への参加が難しくなったという事情があり、スキットルズについての研究成果発表は遺憾ながら2017年度に持ち越すこととなってしまった。センセーション・ノヴェルのように、近年の文学史読み直しの動きのなかで、新たに正典に加わりつつあるジャンルについては、イギリスの Victorian Popular Fiction Association といった学会に参加して、つねに最新の情報を得ていく必要がある。まずは今年度中に、研究の成果を紀要に発表し、さらにブラッシュアップして、海外に向けて発信していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

永富 友海、Richard Nemesvari, Thomas Hardy, Sensationalism, and the Melodramatic Mode についての書評、ハーディ研究、査読無、41 巻、2015 年、67-73、ISSN: 1881-6266

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

永富 友海、オリヴァーの見る夢 『オリヴァー・トウイスト』における「ファミリー・ロマンス」の行方、英国小説研究、英宝社、査読無、No. 26、2017、55-86

永富 友海、『遠い山なみの光』における差異と反復、英国小説研究、査読無、No. 25、2015、129-153

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

永富 友海 (NAGATOMI, Tomomi)
上智大学・文学部・教授
研究者番号：60305399